



TITLE:

日本語言語材料の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

今栄, 国晴

CITATION:

今栄, 国晴. 日本語言語材料の研究. 京都大学, 1965, 教育学博士

ISSUE DATE:

1965-09-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211644>

RIGHT:

【 9 】

氏 名	今 栄 国 晴 いま え くに はる
学位の種類	教 育 学 博 士
学位記番号	教 博 第 1 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 9 月 28 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教育学研究科教育方法学専攻
学位論文題目	日本語言語材料の研究
論文調査委員	(主 査) 教 授 佐 藤 幸 治 教 授 下 程 勇 吉 教 授 倉 石 精 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、教育心理学の重要な領域をしめる学習の研究において、研究遂行上不可欠な言語材料をとりあげ、その諸特性を総合的体系的に分析したものである。

論文は下記のような3編より構成されている。

第1編 日本語2字音節の研究

ここでは日本語2字音節の中から200個を抽出し、これについて下記のような11の特性を求めた。

- | | | | |
|---------|---------|----------|-----------|
| 1. 出現頻度 | 2. 語頭頻度 | 3. 語彙数 | 4. 無連想価 |
| 5. 有意味度 | 6. 1字連想 | 7. 学習難易度 | 8. 評定有意味度 |
| 9. 発音性 | 10. 熟知度 | 11. 感情性 | |

これら11の特性についての測定値について、さらに因子分析を行なった結果、2因子が抽出された。第1因子は学習難易度、評定有意味度、無連想価、有意味度などに負荷が高かったので、「意味性因子」と名づけられた。第2因子は、出現頻度、語頭頻度、語彙数、1字連想、熟知度に高い負荷があったので「頻度因子」と名づけられた。

さらに両因子が実験場面においても有効に働らくかどうかをみるために、対連合学習の反応語において、意味性（無連想価で代表）と頻度（出現頻度）を変数として実験を行ない、それぞれ有効な実験変数であることをたしかめた。

第2編 日本語1字音節の研究

1字音節については、まず可読閾を実験的に調べ、さらに読み易い文字で構成された2字音節は、読み難い文字のそれよりも認知閾が低いことを見出した。

またここでも2字音節と同様に特性を分析し、13特性（有意味度、出現頻度、反応種類数、1字目2字音節総連想価、1字目語頭部分頻度、2字目M連想比、2字目N連想比、2字目2字音節総連想価、2字目2字音節総有意味度、2字目語頭部分頻度、語頭率、首位率）について因子分析をした結果、「1字目

因子」と「2字目因子」が抽出された。

第3編 日本語近似系列の研究

ここでは、情報理論的な測度である近似度を操作して6実験を行ない、文章や系列の段階では、近似度が1つの重要な変数であることを見出した。また日本語の平均情報量と冗長さも測定されている。

以上のような、2字音節、1字音節、系列(文章)の3層にわたって分析された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、言語学習の基礎研究をめざしたものであって、言語学習の心理学的研究に常用される言語材料の諸性質を、日本語について体系的に測定し、これを規定する変数を明確にし、今後の心理学的研究に対して、材料面での条件設定をより確実、より容易ならしめんとしたものである。

本研究は、単語のモデルとして日本語2字音節をとり、その諸性質の測定を中心としているが、さらに単音節として清音1字音節、及び文章のモデルとして近似系列による文章材料についての測定及び実験的研究を加えて、日本語言語材料の総合的な研究を意図している。

本論文の意義は、従来散発的部分的に測定されていた言語材料の性質を、11個の測度により評定し、相互の関係を明らかにし、複雑な諸特性の整理を行なった点にある。11個の測度の中には、本研究者の創案による語頭頻度という測定値も含まれているが、これら11個の特性の因子分析を行ない、それぞれ意味性因子、頻度因子と名づける2個の因子を抽出した。言語材料の諸特性がこのような2因子に整理されたことは、この論文をもって最初とする。

さらに本論文はこの2因子を学習実験の変数として、実際に使用した場合の妥当性を検討しその実用性を証明している。

なお1字音節については、学習心理学的研究がまだ進められていなかったが、この研究によってその性質についての新知見が提供された。

本研究は、言語学習の基礎研究として、今後の教育心理学的研究の発展に資すること多大なものがあると考えられる。

よって、本論文は教育学博士の学位論文としてじゅうぶん価値あるものと認められる。